

[報告] 『幸手町のかたりべ』に記された

埼玉県幸手市における 1923 年関東地震

栄東中学校 篠田 海遥・野間 鉄心

栄東高等学校 荒井 賢一

The 1923 Kanto Earthquake in Sate City, Saitama Prefecture written in "Sate-machi no Kataribe"

Miharu SHINODA*, Tesshin NOMA

Sakae-Higashi Junior High school, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City,
Saitama, 337-0054 Japan

Ken'ichi ARAI

Sakae-Higashi High school, 2-77, Suna-cho, Minuma-ku, Saitama City,
Saitama, 337-0054 Japan

As continued study of the 1923 Kanto Earthquake in Saitama Prefecture, we conducted the survey of Sate City. The detail memory of the Kanto Earthquake is described in the reference called "Sate-machi no Kataribe" composed of essay by fifty persons having experienced the earthquake. According to the reference, present Sate City was damaged by oscillation of the main shock and destroy of houses or school building occurred by the aftershocks. We gathered the description in tables. We also conducted the survey of the memorial stones described in the reference.

Keywords: 1923 Kanto Earthquake, Sate City, Sate-machi no Kataribe, memorial stone.

§ 1. はじめに

1923(大正 12)年 9 月 1 日 11 時 58 分に発生した神奈川県西部を震源とする関東地震(M7.9)は、東京都や神奈川県を中心に、建物の倒壊や火災などによって大きな被害をもたらした。震源域から少し離れた埼玉県でも、建物の倒壊による被害が生じ、316 人が犠牲になった。著者の所属する栄東中学・高等学校の理科研究部では、2012(平成 24)年より、埼玉県内に残る関東地震に関する記録の調査をおこなっている。その結果、さいたま市内に建つ石碑[石黒他(2014)、石黒他(2015)]、春日部市内に建つ石碑[荒井他(2017a)]および春日部市郷土資料館に保管されている資料[荒井他(2017b)]を、本誌の資料や報告として発表してきた。

これらの継続研究としておこなった本研究は、埼玉

県の東部に位置し、茨城県と千葉県に隣接する幸手市を対象地域とした。関東地震が発生した 1923 年当時、現在の幸手市は 8 つの町村(家屋の全壊率が高かった順に幸手町・上高野村・八代村・桜田村・行幸村・吉田村・権現堂川村・豊岡村)に区分されていた (§2 の図 2 を参照)。この地震により幸手市では、家屋 3998 軒のうち約 11% の 453 軒が全壊し[諸井・武村(2002)]、死者は 11 人[諸井・武村(2004)]であった。

本研究では、1983(昭和 58)年に幸手町教育委員会により発行された『幸手町のかたりべ 第一集 関東大震災編』を調査対象とした。1983 年の時点では、前述の 8 つの町村は合併しており、幸手町(現在の幸手市と同じ領域)とよばれていた。1986(昭和 61)年に、市制の実施により幸手市となった。本稿では、震災当時(上記の合併前)の幸手町を、「旧幸手

* 〒337-0054 埼玉県さいたま市見沼区砂町 2-77

電子メール : miharush@icloud.com

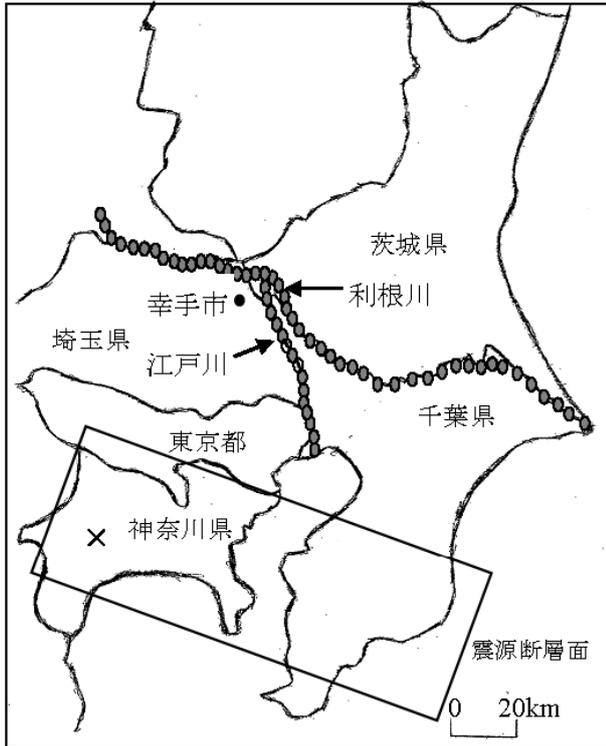


図1. 幸手市とKanamori (1971)による1923年関東地震の震源断層面の位置

Fig.1 Location of Saitate City and seismic fault area of the 1923 Kanto Earthquake by Kanamori (1971)

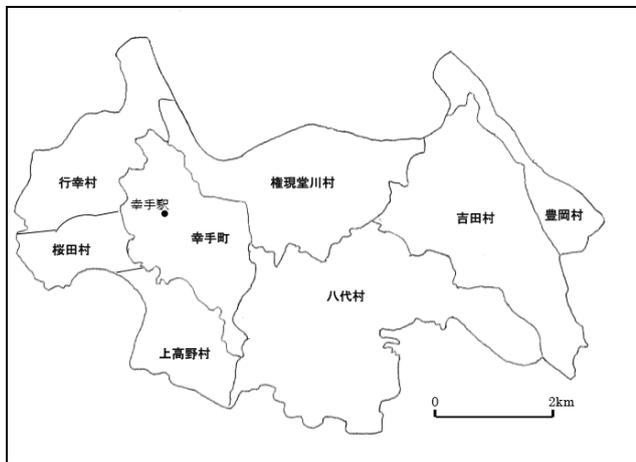


図2. 幸手市の旧町村名

Fig.2 Old town or village corresponding to the present Saitate City.

町」と記述する。また、1983年の時点での幸手町を指す場合には、単に「幸手町」と記述する。

『幸手町のかたりべ 第一集 関東大震災編』が編集されたのは、震災から59年が経っているものの、すべて地震を経験された本人の証言である。本人が目にした地震直後の状況や、余震の発生によって新た

な被害が生じたことなど、当時の状況が具体的に記載されている (§2 に記述)。それには、神社や寺院に建つ震災に関する石碑、寺院に保管されている木碑に関しても記されており、それぞれ現地を訪れて碑文を調査した (§3 に記述)。

§2. 『幸手町のかたりべ』の調査結果

関東地震の震源断層面[Kanamori (1971)]と幸手市、および江戸川と利根川の位置を図1に、震災当時の旧町村区分を図2に示す。

『幸手町のかたりべ』(以下、『かたりべ』と記述)は、郷土が歩んだ生々しい歴史をまとめたものである。第一集(1983年発行)は本研究の対象地震である関東地震によって引き起こされた関東大震災、第二集(1984(昭和59)年発行)は1947(昭和22)年に発生した大水害、第三集(1985(昭和60)年発行)は太平洋戦争をテーマにしている。

本研究の対象とした『第一集 関東大震災編』は、震災を経験した50人の方々が書いた作文で構成されている。50人分の作文1つ1つを詳しく読み取ることによって、幸手市の当時の詳細な状況を把握することができた。具体的には、次のことに着目し、表1~6にまとめた(表はすべて、§2の本文の後にまとめて載せている)。表1-1~6中には、当時の年齢および1983年の時点で住んでいた住所(地区名)を記述している(各人の分布を図3と図4に表す)。

- ①本震発生時の状況(表1-1, 表1-2)
- ②余震に関すること(表2)
- ③野宿を余儀なくされた人々に関すること(表3)
- ④地割れや液状化現象(表3)
- ⑤地震による火災(表4)
- ⑥人々の移動(東京からの避難民や見舞などのために上京する人々)(表5)
- ⑦流言飛語(デマ)(表5)
- ⑧震災からの復興(表6)

表の作成にあたっては、50人の作文に、(掲載されている順に)No.1~No.50までの番号を付している。『かたりべ』に記されているままの表現を用いることを心がけた(表現が分かりにくい部分は、分かりやすいように直している)。「◎」を付している記述は、他者から聞いた話として作文に記載されているものである。なお、上記の①~⑧のうち、記載が無い場合には「/」としている。

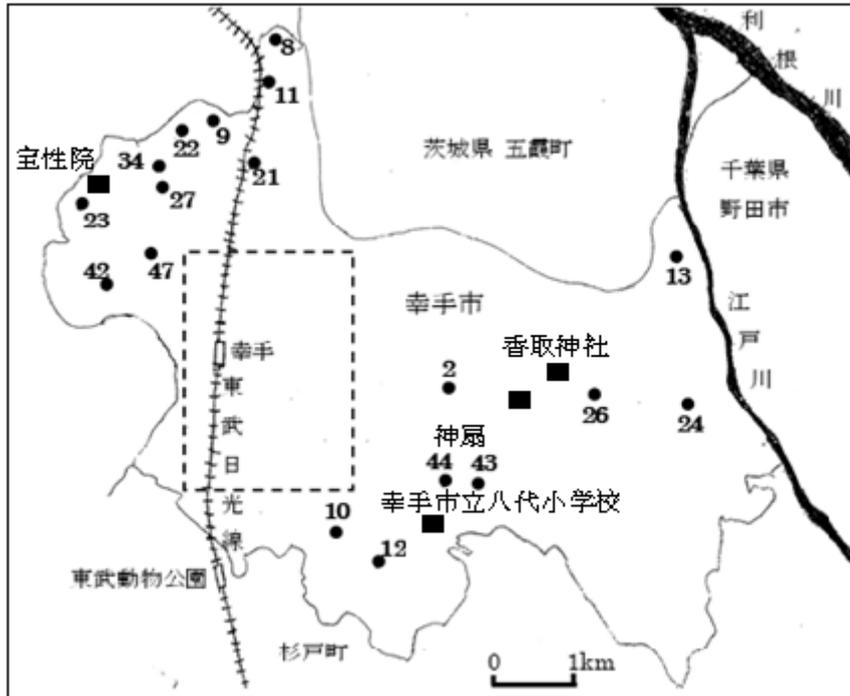


図3. 『かたりべ』に記されている作文を書いた人の分布(幸手駅周辺部を除く)

Fig.3 Distribution of the persons who wrote the essay written in the "Kataribe" except the Satte station area.

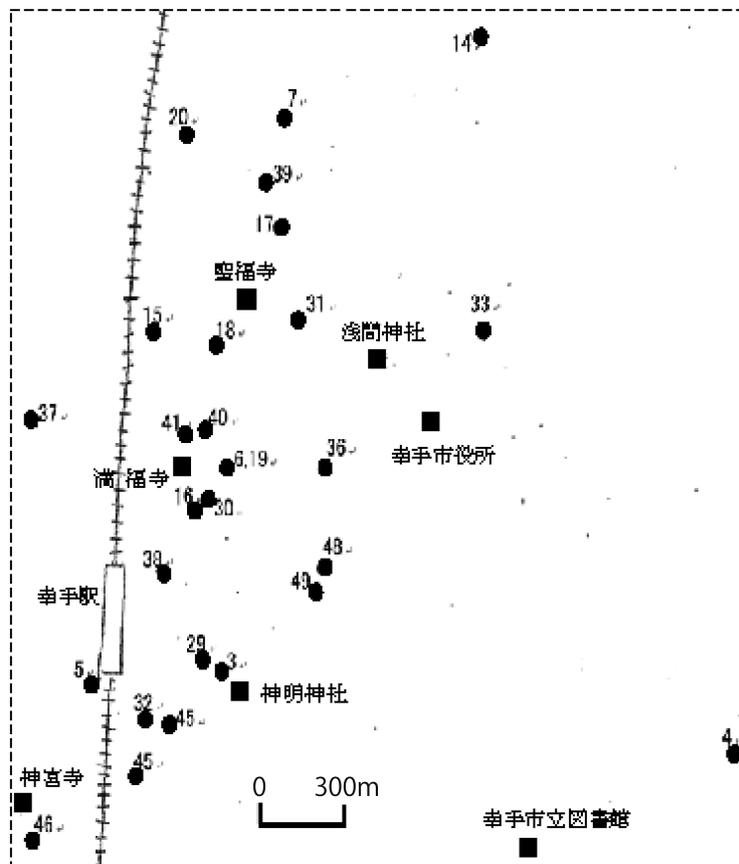


図4. 『かたりべ』に記されている作文を書いた人の分布(幸手駅周辺, 図3において破線で囲まれた領域)

Fig.4 Distribution of the persons who wrote the essay written in the "Kataribe" around the Satte station surrounded by the broken line.

図 3 および図 4 の作成にあたって、作文 No.1, No.25, No.50 を書いた方々の住所については、現在は無くなってしまっていたため、正確な位置を特定できなかった。以下(2.1~2.7)に記述することは、特にことわりをしない限り、『かたりべ』に記されている内容である。

2.1 本震発生の記述

本震発生時の記述は、「本震時居場所」、「被害」、「人々の行動」に分けて表 1-1 と 1-2 にまとめている。

複数の人が、揺れを感じて竹藪へ逃げようとしている。しかし、とても強い揺れであったため、身動きが取れずに逃げることができない人も多かった。

幸手市で、最も震度が大きかったのは、旧幸手町と旧上高野村(ともに、現在の気象庁震度階級で震度 6 強)である[武村・諸井(2002)]。実際、旧幸手町では家屋 1029 軒のうち約 27%の 276 軒が全壊、また旧上高野村では家屋 316 軒のうち約 16%の 52 軒が全壊している[諸井・武村(2002)]。

『かたりべ』の記載から、旧八代村の神扇地区でも、被害が極めて大きかった様子が窺える。神扇地区には、扇沼という開墾された集落があり、土地が軟弱であったため、家屋 53 戸のうち約 21%の 12 戸が全壊、25 戸が半壊し、全半壊合わせると約 69%の 37 戸が被災した。また、神扇沼では、地震による揺れにより、沼の水が波立ってあふれ出てしまった。また、同集落では液状化現象も確認されている。そのことに関しては 2.7 で記述する。

2.2 余震発生時の記述

余震発生時の記述は、「人々の行動」、「発生日時」、「頻度」、「強さ」、「被害」とし、表 2 にまとめている。

余震は強弱それぞれあり、回数もかなり多かった。中には、本震の発生から 4 日間ほど余震が収まらなかったという記述があった。また、余震によって倒壊した家屋や小学校の校舎もある。このように、余震によって建物が倒壊する可能性があるということを、今後の防災を考える上でも留意しておきたい。

2.3 野宿、地割れや液状化現象に関する記述

野宿を余儀なくされた人、地割れや液状化現象に関する記述は、表 3 にまとめている。

本震の発生時から、余震による家屋の倒壊を懸念して、外にカヤを吊ったり、小屋(バラック)を建てたり

して過ごしていた。この意味でのバラックとは、緊急に建てた小屋のことである。

また、複数の記述から、幸手市では地割れや液状化現象も発生していると推定される。幸手市市民生活部環境課のウェブサイトによると、幸手自体が利根川の底だった時代があった。そのため、地盤がとても軟弱である。これは、液状化現象が発生した原因の 1 つと考えられる。

震災当時、高齢の方は、「幸手は地割れが起きやすい地域である」という認識をしていた。これは幼い頃に、1855(安政 2)年に発生した安政江戸地震を経験しているか、先代からその話を聞いていたためであるようだ(安政江戸地震でも、幸手市は、被害が生じており、地割れもあった)。この教訓からカヤを吊る家があったという旨の記載も見られる。

2.4 地震によって発生した火災の記述

地震によって発生した火災の記述は、「東京の火災」、「降灰」、「幸手の火災」とし、表 4 にまとめている。

幸手市内でも火災が発生したが、東京ほどの大火災にはならなかった。幸手の人々の多くが、本震が発生したとき、落ち着いて火を消す行動をとったからであろう。例えば、表 1-1 の No.12 には、本震発生時の人々の行動に、「かまどの火を夢中で消して逃げ出した」という記載がある。人々のそのような行動は、本震発生時だけではなく、余震の時にもみられた。大地震の発生時に、冷静さを保つのは難しいことではあるが、見習わなければならない。

東京で大火災が発生した理由の 1 つに、当時の気象条件が挙げられる。多くの作文の冒頭部分に、「地震が発生した 9 月 1 日は、台風が接近していたので風がとても強かった」というような記述がある。実際に、1923 年 9 月 1 日の天気図を見ると、日本海に低気圧が表示されている。

2.5 人々の移動と流言飛語の記述

人々の行動の記述は、「避難民」、「上京する人々」とし、表 5 を参照とする。『かたりべ』には、「本震の発生した 9 月 1 日の夜からしばらくの間、東京からの避難民がとても多く、その中からデマが流れてきた」という記載があった。当時は、人から人へと伝わっていく情報も重要な通信手段であったので、デマもたくさん流れてしまったのだろう。東京で井戸に毒を入れる等の悪いことをする人がいて、幸手にもやってくるという

デマにより、自警団が組織された。そのような混乱はあったものの、幸手市内では、人が殺害されるというような事態にまでは発展せずに済んだ。

現代では、通信機器が発達して、ラジオやテレビなどで瞬時に情報が正確に伝わるようになった。そのため、当時に比べてデマが一人歩きしてしまう心配は少ないと思われがちだが、SNSなどを通じてデマが流れることもあり得るので、冷静な判断をするよう十分に注意が必要である。

2.6 復興の記述

復興に関する記述は、表6にまとめている。

当時、復興に要する資材が高騰し、復興がなかなか進まなかった状況が窺える。それでも、本震の発生から5~6日後には復興に向けて動き始めているという記載や、震災の発生から2年間ほどかけて復興に至ったという記載も見られる。

2.7 旧八代町神扇地区の被害

2.1で述べたように、神扇地区(旧八代村)でも、関東地震の本震による被害がとても深刻だった。この地域も、地震によって揺れやすい軟弱な地盤であった可能性がある。表7は、1979(昭和54)年に、旧八代町神扇地区に位置する小学校(当時の幸手町立八代小学校、現在の幸手市立八代小学校)において、株式会社カトー基礎調査研究所によっておこなわれたボーリング調査の結果である。N値は地盤の強度を求める数値で、ドライブハンマーを76±1cm自由落下させてボーリングロッド頭部に取り付けたノッキングブロックを打撃し、ボーリングロッド先端に取り付けた標準貫入試験用サンプラーを地上に30cm打ち込むのに必要な打撃回数である。N値15以上は比較的安全とされている。神扇地区では、地上付近のN値が低く、震災当時この付近が軟弱な地盤であったと考えられる。

表1-1. 本震に関する記述(作文 No.1~No.25)

Table.1-1 Description of the main shock (No.1 - No.25).

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	本震時居場所	本震発生時	
				主な被害	人々の行動(作文者の行動)
1	23	千塚	自宅	住居、長屋ともに被害はなく、もとつき場として使用していた小屋のみ倒壊	夢中でよるめきながら、裏の竹山や庭に逃げ出し、竹につかまったり、庭にはつてしずまるのを待った
2	9	神明内	自宅(浄誓寺)	幸手小学校の校舎が倒壊した	遊びをやめたまま逃げ出そうとも考えない
3	16	中2丁目	ぎこや	被害は軽少、しかし隣近所の家が潰れた。	外へ出ようにも体がふらついて立って歩けない、どうやって外へ出たか覚えがない
4	16	天神島	自宅	近所の母屋4戸倒壊、平須賀の小学校倒壊、用水路の水が左右に打ち上げられていた	庭に飛び出した
5	20	南3丁目	自宅	志手橋の左右の家がバタバタ潰れている	外に出たが歩けない、木につかまって
6	19	中4丁目	自宅	家屋の全半壊は数軒あり	以前から聞かされていた通りに竹藪に避難しようとしたが、足がすくんでなかなか動けず、やっとの思いでたどり着いた
7	17	北1丁目	自宅	近所の今の2丁目に当たる道路の東側の家が4軒倒壊し、いずれも裕福家庭だった	強震にたえかね、家の外に飛び出した
8	22	外国府間	渡辺本家 外国府間	家は無被害	/
9	10	松石	庭	30度傾斜、壁の土が床の上に落ちた、台所は大きくひび割れ、幅15cm、松石は潰れた家無し	母は庭に飛び出し、地震だ地震だと叫びながら庭にいた私を引っ張るようにして脇の竹やぶに入り、家、庭の様子を見ていた
10	16	平須賀	杉農の帰路	自転車の人は大地に叩き付けられ、土煙を上げて崩れゆく家屋、白壁の土蔵、大小の樹木、道路を洗う河川の水、部落内に多大な被害	歩行困難で地に伏す
11	29	外国府間	養蚕室	一部下屋の壊れた箇所があったものの大きな被害なし	階下の米俵の間に昨年生まれた子供が寝かせてあることに気づき、梯子を夢中で駆け下りて子供を抱え込んだ、梯子が倒れなかったのが不思議
12	23	戸島	自宅	母屋も納屋も半壊に近い、地域の被害は、神社3社、民家1戸全壊、八代村の小学校3校とも被災	かまどの火を夢中で消して庭に出た
13	14	西関宿	桑畑	土倉の壁が崩れ落ちた	とっさに桑の木につかまって激震がやむのを待っていた
14	8	北3丁目	自宅	学校の西校舎が倒壊	/
15	21	中4丁目	自宅	近所で7軒倒壊	驚いて外に出た、自宅も倒れ、倒れた瞬間が目には焼き付いている
16	9	中1丁目	自宅	工場が倒れてきた	表の道路へ一生懸命進んだ
17	19	北1丁目	自宅	屋根から瓦が落ちてきた	外へ飛び出し、櫻の木にしがみついた
18	17	中4丁目	自宅	/	両手を地面について、犬のようにしてやっとの思いで庭の木の根元までたどり着いた
19	20	中4丁目	自宅	向かいの家倒壊、そのさきの飯村医院は本震で1階、余震で2階が倒れた	戸外へ逃げようと思ったが何としても足が進まず、転がりながらかろうじて庭に飛び出した
20	16	北1丁目	自宅	前の家と納屋が崩れた	ひどい揺れ方で立っていることはできなかった
21	15	高須賀	旧豊田村河原代	/	裏山に逃げ出し、地面を這うようにして静まるのを待っていた
22	18	松石	自宅	松石では母屋の倒れた家はなし	地面に這って静まるのを待った
23	21	千塚	自宅	上千塚では、母屋1軒、納屋1軒倒壊	夢中で這うように逃げ出し、竹につかまって静まるのを待った
24	13	惣新田	自宅	◎下川崎が一番被害が多かった模様、約40戸のうちほとんどの家で倒壊家屋または半壊家屋、多大な被害を受けたとのこと	慌てず避難するよう言われたが慌てて竹林に飛び込んでしまった
25	23	惣新田	西関宿	近くの二階建ての家が倒れた	立っていることができずに這っていた

表 1-2. 本震に関する記述(作文 No.26~No.50)

Table.1-2 Description of the main shock (No.26 – No.50).

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	本震時居場所	本震発生時	
				主な被害	人々の行動(作文者の行動)
26	11	下吉羽	自宅	香取神社は本殿上屋がずれ落ち、鳥居や灯笼が倒壊、共同墓地では倒れた墓石半分以上	よろよろと竹藪へ飛び込んでいった
27	15	千塚	役場	家は南側に倒壊していた。近所の家では2軒倒壊	びっくりして役場の裏へ飛び出したが、たっぺいられないので役場の塀につかまっていたが、つかまっても転んでしまうほどだった
28	29	惣新田	自宅	近所でも全壊した家や半壊した家が数軒あった	家族全員で竹藪に這うようにして逃げ込んだ
29	9	中1丁目	幸手商業高校の通りにある小川	◎浅間横丁で2軒、旧荒宿町で何件か、久喜町から助町にかけても何件か倒れた	変だと気付いて川を出て対岸の道を上ったが、とても立ってられず、道へ手をつけて這っていた
30	9	中1丁目	自宅	曲がった家、つぶれた家、瓦の落ちた家で道路は真ん中だけしか歩くところがない、◎小学校の教室がつぶれた。	私が庭に飛び出したのと家が倒壊するのは同時だった
31	10	北2丁目	お隣の家	/	立って外に逃げようとしても歩けず、叔母さんに両手を抱えられ、庭に飛び出した
32	23	南1丁目	自宅	2, 3軒の家が倒壊	驚いて家の中から裏に逃げ出し、ハンノキの根元につかまっていた
33	8	東5丁目	自宅	近くの寺の境内にあった観音堂の建物が、大音響とともに崩れ落ち、自宅、近所の家も軒並み倒壊した。小学校も倒壊	やっこの思いで庭にはいり出て、木につかまり、木と一緒に揺れながら付近の状況を見ていた
34	19	円籾内	自宅	母屋はつぶれてしまった。大字円籾内では母屋がつぶれた家自宅含め3軒	最初は小さい揺れだったがそのうち大きくなったので後ろの竹山に逃げ出した
35	15	南1丁目	自宅	倉と長屋門の瓦が落ちた。近所の家が倒壊。	おひつにつかまっていたが、揺れが激しいので表に出ようとしたが、なかなか歩けなかった
36	19	中3丁目	自宅	中4丁目では将棋倒しの家あり	地面を這って歩いた
37	24	中5丁目	上野公園	/	/
38	15	中1丁目	自宅	◎江戸街道ではつぶれた家がたくさんあった	突然ぐらっと来たので皆びっくりして飛び出したが立って歩けないので這って竹藪にでたが、父は家の大黒柱だといひ出なかった
39	8	北1丁目	自宅	周辺では7, 8軒全壊、2軒ほど半壊。	家の向かい前の砂利置き場に腰を下ろした
40	17	中4丁目	近所の工場	近所で地震によって倒れた家はなかった	大急ぎで機械の電源を切り、外に出て、庭の立木につかまった
41	8	中4丁目	自宅	近所では家は1軒も倒れてないが、小学校の西校舎一棟が倒れた。	二階から階段を下るのが大変でなかなか降りなかった。ようやくのことで外に出て庭の木につかまっていた。
42	17	中川崎	自宅	家の中に50俵も積んであった麦俵が戸を破り、中に入ることもできなかった	火を消して外の竹山へ逃げようとしたが地面に足をすくわれ、何度も転んでやっこの思いで竹にしがみついた
43	23	神扇	/ (多分自宅)	扇沼という開墾された部落のため、地盤が軟弱のため、全53戸中全壊12戸、半壊25戸となった	/
44	18	神扇	自宅	家屋半壊。神扇は四面沼にて全壊母屋20戸、半壊40戸。	/
45	22	南1丁目	自宅	自宅の前の家がべちゃんこに倒れた。そのほかにも近所の家倒壊あり。	立ってられず互いに手や肩を取り合って支えていた
46	19	南2丁目	八代村の二本木付近の実家	上高野付近の長屋が全部倒壊してしまった。	大地がぐらっと揺れ、車にしがみついたが、地震が大きいので竹藪に避難した
47	11	下川崎	自宅付近の香取神社の隣の安楽院付近	大きなお稲荷様が倒れた。全42戸のうち母屋5戸、長屋物置6棟全壊、門がつぶれ、畜舎が倒れ、ほとんどの家が変わり果てたという被害があった	大杉にしがみついたが倒れそうなので松の木にしがみついた
48	33	中3丁目	幸手農協本所付近	周りを見ると、隔離病棟の病室が次々壊れていった。隣の家がつぶれ、小学校教室一棟つぶれた	突然自転車から転げ落ちてしまい、再び乗ろうとしても激しく転んで立ち上がれない、ここでやっど地震に気づき、夢中で這って道路わきの柳の木につかまった
49	21	中2丁目	自宅	/	ずしんと体を持ち上げられ、這うようにして庭に出て、作業用の太い杭につかまって収まるのを待った
50	21	千塚	自宅	下千塚では母屋3戸、長屋1戸、作業場1戸倒壊	自宅の裏の雑木林の木につかまって揺れが静まるのを待った

表 2. 余震に関する記述
Table.2 Description of the aftershocks.

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	余震発生時				被害(主に余震のみ)	人々の行動
			発生日時	回数(頻度)	強さ			
1	21	千塚	/	/	/	/	あわてて火を消し逃げ出した、また食事中も茶わんを持ったまま庭へ飛び出した	
2	9	神明内	本震後すぐ	何回となく、幾度となく	大きい	/	座敷に居た時に初めて怖さを感じた	
3	16	中2丁目	1日昼間から	しきりなしに	/	近所の家が潰れる	気持ち悪くて家に入る気がしない	
4	16	天神島	/	次から次へと	/	/	親戚や友人の様子も分からず不安を持った	
5	20	南3丁目	やっと落ちついたかと思う間もなく余震	次から次へと	かなり大きい	2、3回目の余震で家が潰れた	/	
6	19	中4丁目	10数分後	夕方までに3~4回	大きい	/	/	
7	17	北1丁目	/	数回繰り返す	強弱	/	これから世の中がどうなることかと不安感を増すばかりだった	
9	10	松石	1日午後	幾度も	あまり大きくない	/	/	
10	16	平須賀	/	回数は減っていった	大小	/	/	
12	23	戸島	/	何回となく	/	屋根の瓦が落ちた、地域の被害は1日夕方の余震で1戸倒壊	母屋や納屋に支えをした	
13	14	西関宿	/	断続して	大きい	/	/	
14	8	北3丁目	/	小刻みに余震を繰り返す	/	/	/	
15	21	中4丁目	/	たびたび	/	/	余震で安心して眠れなかった。	
16	9	中1丁目	/	時切らず続いた	/	余震では少ない	/	
17	19	北1丁目	本震後すぐ(本文からの予想)	絶え間なく	猛烈な地震	/	歩けない	
19	20	中4丁目	/	2、3日は収まらなかった	/	飯村医院、本震で1階、余震で2階が潰れた	余震への不安があった	
20	16	北1丁目	1昼夜半ぐらい続いた	大きい地震と小さい地震が交替に来る	/	/	/	
21	15	高須賀	/	/	/	/	/	
22	18	松石	/	何回となく続く	/	/	/	
24	13	惣新田	/	ひっきりなしに	/	/	/	
26	11	下吉羽	夕方	何回となく	夕方の余震が強かった	/	/	
28	29	惣新田	/	こきざみに	/	/	/	
29	9	中1丁目	/	500m歩くまでに5、6回余震があった	/	/	/	
30	9	中1丁目	/	次から次へと	/	/	揺れ返しのたびに外へ飛び出した	
31	10	北2丁目	/	次々と、100回くらい	/	/	/	
32	23	南1丁目	/	引き続き起こる	/	/	恐ろしくて家の中に入ることができない	
33	8	東5丁目	/	何十回となく続く	/	/	夜、余震におびえていた	
35	15	南1丁目	/	たびたび	/	/	/	
36	19	中3丁目	/	しきりなく	/	/	/	
37	24	中5丁目	2日夕方	ちよくちよく	2日夕方の余震が強い	2日夕方の余震で町では何件か潰れた	家が傾いていることを心配していた	
39	8	北1丁目	/	夜に3、4回	/	家の物置のひさが杉木へ寄りかかるように倒れた	/	
40	17	中4丁目	/	度々	/	/	余震のたびに外へ飛び出した	
41	8	中4丁目	/	度々	/	/	/	
42	17	中川崎	本震6、7分後		本震6、7分後に大きく揺れた	/	/	
43	23	神扇	/	後々続く	/	/	/	
45	22	南1丁目	/	何回となく来る	/	/	/	
47	11	下川崎	/	たびたび	/	/	/	
48	33	中3丁目	/	何回となく	/	/	/	
49	21	中2丁目	/	しきりなしに	/	2日夕方にあった余震で倒壊家屋が続出し、幸手町立尋常小学校の西校舎が倒壊した	/	
50	21	千塚	/	頻発	/	/	鍋の汁が余震でこぼれてしまった	

表 3. 野宿, 地割れや液状化現象に関する記述

Table.3 Description of evacuation life outside the home, crack in the ground and liquefaction.

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	野宿	地割れ・液状化
1	21	千塚	庭の敷石の上にむしろを敷き、仮の居間に整えた	/
2	9	神明内	藁を庭に敷き、四方に丸太柱をたて、天井によしずをはり、カヤをつけて中に布団を敷いた	/
3	16	中2丁目	地割れするから危ないと祖母が言って竹竿を庭に並べ、むしろを敷き、カヤをつけて寝た(2,3日)	/
4	16	天神島	仮宿を竹山や空地につくるので大変苦労した	井戸が2m増水
5	20	南3丁目	余震がくるので中に居られないので外にカヤをつけて寝た	/
6	19	中4丁目	家に寝ることは危険ではないかという大人たちの知恵により、庭の真ん中に寝床を作った	/
8	22	外国府間	家で寝た	/
9	10	松石	外でカヤをつけて寝た	土台より入口が30cm盛り上がった 庭にはいたるところにひび割れ そこからすごい濁り水が出てきた
10	16	平須賀	傾いているもの家で起居	/
11	29	外国府間	1日と2日の夜は、庭にむしろを敷き、仮住居を作り、カヤをつけて父母は母屋に、子供は庭に寝た	/
12	23	戸島	庭に休むところと寝るところを作ったカヤをつりカヤの中にワラやコモで休めるようにした	/
13	14	西関宿	庭先で仮眠	地割れあり、そこから砂と水が噴き出していた
14	8	北3丁目	庭に竹山がある家はそこで幾晩も野宿	本震時時地面が水を含んで緩んできた、家の裏が大きく地割れし、液状化
15	21	中4丁目	空き地に雨戸の戸板を敷いて寝た	/
16	9	中1丁目	庭にむしろを敷いて仮屋敷をこしらえた 照明は石油ランプと提灯を使った	/
17	19	北1丁目	瓦の飛んでこないところに古材を並べ、その上に戸板をのせ、畳を敷き、ゴザをテント替わりに使用して野宿した	/
18	17	中4丁目	外に戸板を敷き、その上にむしろと布団を敷いて一週間寝た	/
19	20	中4丁目	戸外の生活をした	/
20	16	北1丁目	/	庭先に東西に2本の地割れ。揺れるたびに砂と水が噴き出してくる
21	15	高須賀	/	粕壁あたりの道路が割れてる
22	18	松石	8日くらい外で寝た	/
23	21	千塚	3晩竹山で寝た	/
24	13	惣新田	家の中で寝ることにした	/
25	23	惣新田	/	武蔵と下総の境といわれる低地から泡のような水が噴き出している
26	11	下吉羽	家の中に眠るのは不安で、仮小屋や戸外にカヤを吊り、いく夜を過ごした家庭もあった	/
27	15	千塚	家が倒壊したので2日ほど野宿した。その後家の2階をかしてくれてので、そこで寝た	/
28	29	惣新田	余震を恐れて庭にむしろを引き、家族とともにそこへ寝た	/
29	9	中1丁目	前の畑の中へバラックを作って自分の間そこで寝た	/
30	9	中1丁目	1日野宿、2日に6坪のバラックが建った	/
31	10	北2丁目	/	地面は地割れし歩くこともできない
32	23	南1丁目	日没となり、各家庭は苦心してカヤを取り出し、電柱や倒れた家等につて夜を過ごした	/
33	8	東5丁目	夜に入る家もないので庭にむしろや天幕で小屋を作った	/
34	19	円藤内	余震が続くので庭にむしろを敷き、仮住を立ててカヤをつけて4日ほど外に寝た	田んぼの地割れのため底のほうから青泥水が吹き出ており、その付近の道路が20日ほど不通になった
35	15	南1丁目	揺れになったらすぐ飛び出せる部屋にカヤをつけて寝た、国道にカヤを吊った家もたくさんあった	地割れもあった
36	19	中3丁目	/	幸手久喜間の県道、幸手加須間の県道は田んぼより低いくらいに陥没
37	24	中5丁目	庭にカヤを吊り寝た	上野公園地割れしてくる、王子駅のホームで地割れがしていた、久喜幸手間で地割れがしているから注意してくださいと言われた
38	15	中1丁目	/	コイやフナが釣れる池があったが地震で地割れして砂が噴き出し、漁場がつぶされてしまった
39	8	北1丁目	2日目から家に寝ることが不安になり、庭にバラックを作って2,3日寝た	大通りも5cmほど地割れしたところが2か所あった
40	17	中4丁目	自宅の南側が桑畑だったので雨戸を戸板にしてカヤを吊って寝た	/
41	8	中4丁目	夕方になり、裏の桑畑に雨戸を外し、戸板にして寝ることにしたが、蚊が多く仕方がないので物干し竿をカヤにして寝た	/
42	17	中川崎	板や藁を庭に集め、カヤをつり庭に寝た。15日間寝て、時には雨の日があったので、その日はテントを張った	畑に長さ5~6m、幅1mの地割れがあり、そこから砂が出ていた
43	23	神扇	一夜カヤで過ごした	道路は地割れ、田んぼは堀の中に滑り込み大被害を受けた
44	18	神扇	庭先にむしろを敷いた	大地割れ砂吹き上げ、水噴き出す。
45	22	南1丁目	カヤを吊って仮眠の準備をした	上京する途中地割れに気を付けながら歩いた
46	19	南2丁目	一週間野宿した	/
47	11	下川崎	むしろを敷きカヤを吊り、寝た	/
48	33	中3丁目	夜は外に、雨戸をならべ、その上にゴザを敷き、屋根のないところにカヤを吊った	/
49	21	中2丁目	庭のない近所の人たちと一緒に合宿をした。旧幸手町の商店街は、道路にバラックを立てて過ごした	/
50	21	千塚	3晩ほど雨戸を外して庭に並べ、カヤを吊って外に寝た	/

表 4. 地震による火災に関する記述

Table.4 Description of fire induced by the earthquake.

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	火災	降灰	幸手
1	21	千塚	東京方面の空は地震による火災のためこの地か	/	/
2	9	神明内	近所の人が南の空を見て騒いでいて、見てみると真っ赤だった、翌2日、どこからか「東京が火事」という人が来た	真っ黒なものが風に乗って飛んできた、手に取ってみると、焼けこげた紙の細くちぎれたものだった	/
3	16	中2丁目	東京は大火事	/	家のなべなどで火を扱っていたが、お袋がすぐに火を止めた
4	16	天神島	部落の情報で、東京の大火災が伝わった	東京から灰が小雪のように降り続いた	起きなかった
5	20	南3丁目	夜になって、昼間からあった、東京の方にある入道雲が赤くなった、4日目あたりから雲の色が薄くなった、燃えてる場所が移動したように見えた	2日午後から南風になり、空からひらひらと布切や、紙きれの燃えかけたのが舞い降りてきた	余震の際、近所で火事との情報みんまで消し止めた
6	19	中4丁目	満天を焦す炎の赤色は異様な光景	/	聞いてみたところ勿論皆無
9	10	松石	南の方に白い入道雲が現れ、日が落ちるにつれて真っ赤にそまり輝いていた	2日目、薄黒い灰が落ち始めた	/
12	23	戸島	夕方になると、南の空が赤く見えてきた	当地方まで降灰	/
13	14	西関宿	/	一夜明け、付近一帯に多くの灰が落ちていた	かまどの火が付いたまま家が潰れてしまったが、幸い火は消えていた
14	8	北3丁目	南の空が真赤に燃えていた	/	/
15	21	中4丁目	夜、東京方面が赤く光っているのが火事だと分かったのは次の日だった	/	/
16	9	中1丁目	9月2日東京の人たちが避難してきた時に知った	/	/
17	19	北1丁目	東京で火事	布地の燃えたものが降っていた	/
18	17	中4丁目	/	/	幸手町では火災の出なかったことが不幸中の幸い
19	20	中4丁目	震災の夜から南の空が真っ赤に、2、3日になると東京の火災だと報じられた	/	お手伝いさんが本震時使用していた火を止めたから火災が起ころなかった
20	16	北1丁目	/	/	火災はなかった
23	21	千塚	東京の空が地震の後の火災のため真赤に燃えているさまが見られた	/	/
24	13	惣新田	夜になると東京方面の空が天をも焦がすのごとく橙色に輝いていた	/	農村地帯に火災がなかったことは不幸中の幸いだった
25	23	惣新田	2日、東京が大火事だと聞いた	/	/
26	11	下吉羽	夜に入ると南の空が真赤な入道雲が立ち込めた	時折大火災の灰が上昇気流で飛んでくる	/
28	29	惣新田	1日から3日まで、東京方面の空は真赤になり、隣近所の屋敷が見えるほど明るくなった	/	/
29	9	中1丁目	1日夜、東京方面の空が真赤	/	町のほうを見ると黒煙がもうもうと空へ上がっていった
30	9	中1丁目	南の空には東京の火災の煙が入道雲のように上がり、夜は明るかった	柄や色彩のはっきりした布片も南の季節風によって飛んできた	/
31	10	北2丁目	夕方になると、南の空が真赤に染まった	/	/
32	23	南1丁目	2日の夜になって気づいたが、南の空が赤い	/	/
33	8	東5丁目	翌日南の空が夕焼けのように真赤になっていた	/	/
35	15	南1丁目	あたりが暗くなると、南の空が赤くなっていることに気づき、東京で火災だと分かった。時がたつにつれて南の空はますます赤くなっていった	/	本震後すぐ、火事があったが、早く気づいて消したので、大事には至らなかった
36	19	中3丁目	夕方から南のほう赤かったのが、火事だと分かった、粕壁かと思っていたが、東京だった	/	/
37	24	中5丁目	東京方面の空が真赤	/	/
39	8	北1丁目	/	/	幸手で火災の話はなかった
41	8	中4丁目	翌日の朝になってから東京で火災だと分かった	/	/
43	23	神扇	その夜のうちに東京は火災となる	/	/
44	18	神扇	東京の空は火災で天まで赤い	/	/
45	22	南1丁目	東京方面の空が異常に明るい	/	/
46	19	南2丁目	東京のほうは連日真赤	焦げた衣類の布切れが飛んできた	火事一軒もなし
47	11	下川崎	大人の話では東京が大火災とのこと	/	/
48	33	中3丁目	/	/	火事がなかったのが不幸中の幸いだった
49	21	中2丁目	午後3時ごろ、東京のほう積乱雲のごとく見え、夜になると真赤に見え、東京が火事だと思った	2日になり、焼けた布切れが風に乗って飛んできて庭に落ちていたので初めて東京が火事だと分かった	/

表 5. 人々の移動, 流言飛語に関する記述

Table.5 Description of evacuation of people and false rumors.

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	避難民	流言蜚語	東京へ向かった人たち
1	21	千塚	/	/	親戚が官司として勤めてい東京下谷神社が焼失、見舞いに祖父と一緒に米と野菜を積んで行った
2	9	神明内	3日、親戚の叔母が従弟3人連れてやってきた、足袋はだしのままで手も顔も真っ黒だった、幸手までは汽車、人力車で来た、4日叔父たちも来て、幸手までは日光街道を歩いた	/	/
3	16	中2丁目	/	東京では悪い人が火をつけたり、井戸に毒が投げ込んで歩いて、幸手では自警団が組織、幸手にも来るかもだから準備しておけと親父に言われた	/
4	16	天神島	東京からの焼け出された方々が幸手街道を通過する時の姿は本当に悲しそうなのだった、東京からの避難民で人口が一時的に変わった	悪い人が入り込んだという知らせ、各部落は夜警に当り、夜間の外出はできなかった	/
5	20	南3丁目	3日目あたりから命からがら逃れてきたのか、びっこを引きながらほりだらけになって歩いてくる人、身内と再会して泣いたり突ったりする人を見かけるようになった	悪い人が井戸に毒を入れる、火をつけるとかが流れ、夜番をすることになった	/
8	22	外国府間	/	/	15日に、世田谷に帰った
9	10	松石	/	色々な悪いニュースも飛んだ	父は近所の人と白米、みそ、野菜等をのせて東京の親戚の人々を訪ねて行った
10	16	平須賀	そのうち東京から被災者が、親兄弟、縁者を頼ってきました	/	/
11	29	外国府間	深川から3人、浅草から7人の親戚が避難してきた	/	/
12	23	戸島	夜十一時ごろから東京から関宿、茨城方面へ向かう人が通って行った	青年会の支部長で、杉戸、関宿間の県道、安戸黒馬の用水の橋の上で警戒をしていた、3、4日目頃から暴徒の問題が出てきた	6日朝早く北千住へ東京の祖父のところへ行った 千住は無事
13	14	西関宿	/	雑多な推測や憶測が物騒な流言として広がり、不安なため自警団ができた	/
16	9	中1丁目	9月2日東京から着のみ着のまま逃げてきた人たちが来た	/	3日、父がおにぎりを背負って5日まで東京へ行った
17	19	北1丁目	白足袋はだしの着物を端折った女の人が荷物を少し持って、国府間のほうへ行くのが見えた、親戚も逃げて来た	一層不安になった	/
18	17	中4丁目	7、8日になると、真黒な顔をした被害者の人々が東京方面から故郷へと帰るのでごった返した	2日夕方、在日軍人が悪人が毒を入れるから井戸にふたをしろと注意された	/
19	20	中4丁目	3日ごろから逃げてくる人が次第に多くなった	災害につきものの流言飛語もあり	肉親を訪ねて上京する人あり
21	15	高須賀	/	/	東京まで米俵を2回歩いて届けた
22	18	松石	木立の親戚の家に東京から7日ほど止まって帰った人が6人いた	/	/
25	23	惣新田	8日、数人の避難民が訪ねてきた	死人の懐を狙うような悪人もいたという話を聞いた	東京で火災と聞き親戚が心配になり、様子を見に出かけた
26	11	下吉羽	1夜開けると、日光街道は親戚、縁者を頼ってくる人が後を絶たない	人から人へと噂を呼び、事実無限の情報が入ってくる	東北本線が開通したころ、叔父を訪ねて上京した
27	15	千塚	/	万福寺の裏に暴徒が逃げ込んだとの情報だったが、よく調べると大だった	/
28	29	惣新田	2日、兄が東京から逃げてきた。道路は避難する人と上京する人で混雑していた	/	/
29	9	中1丁目	/	スパイが井戸に毒薬を入れて歩くとき聞いたので男の大人が3、4人で夜警をした	/
30	9	中1丁目	2日ごろから表通りを北に向かって歩く人が増えてきた	/	/
31	10	北2丁目	/	/	東京まで歩いて見舞いに行った
32	23	南1丁目	/	一時釈放された暴徒が暴れまわっていて、井戸に毒薬を入れたりする噂が広がり、自己防衛をそれぞれしていた。	/
33	8	東5丁目	/	悪い人が井戸の中に毒をいれにくるというデマが流れた	/
34	19	円籾内	3日ごろ、東京本所から弟、浅草から妹がそれぞれ帰郷してきた	/	/
35	15	南1丁目	/	様々なデマも飛んだ	/
37	24	中5丁目	東京で大火災にあった人が田舎の親戚に避難してくる	東京で暴動があったという情報が流れてきた	/
39	8	北1丁目	夕方近くなって国道(現在の幸手岩槻線)が人通りが増えた	伝わるニュースの半分はデマ、それによれば暴徒が各地でその土地の住民に迷惑をかけている	/
40	17	中4丁目	東京に住む姉が、避難してきた	/	/
41	8	中4丁目	父の叔父と、父が当時東京にいて、叔父は1日の夕方逃げてきた。父は4日午後3時にやっと帰ってきた	/	/
43	23	神扇	/	火災の原因は悪い人が東京を焼き払い、農村まで来て毒を入れたという流言飛語が流れてきた	叔父叔母の無事を確認しに深川まで行った
44	18	神扇	/	10日より悪人が井戸に毒を入れるとのうわさあり	5日東京本所へオジを探しに行ったが死体しかなかった
45	22	南1丁目	/	3日東京で暴徒問題発生	2日夜明けとともに上京
46	19	南2丁目	リヤカーに死んだ子供をのせた男の人が通った	流言飛語が飛び交い、井戸に毒を入れるという噂あり	/
47	11	下川崎	/	暴動発生との話が伝わった	/
49	21	中2丁目	3、4日ごろから市街地の旧国道は、東京で焼きたされた方々が着のみ着のまま知人を頼って避難してきた	2日ごろから流言飛語が流布された	/
50	21	千塚	親戚が避難してきた	/	/

表 6. 復興に関する記述

Table.6 Description of the reconstruction of the earthquake.

作文	被災年齢	住所(番地の記述はすべて旧幸手町内)	復興
1	21	千塚	宝性院の再建(2年)
4	16	天神島	生活が落ちつくときに品不足
5	20	南3丁目	建築資材は高くなり、人手も足りなくなった
10	16	平須賀	復興資材の日に騰貴 4、5日で電気復旧
11	29	外国府間	現国道4号線沿いの官地の部分の土手下の木3本が倒れてきて、その木を燃料にした
12	23	戸島	一家無事で母屋は手入れをして、納屋は立替をした
14	8	北3丁目	復旧には大変長期間かかった
20	16	北1丁目	2年間かけて全壊半壊家屋の立て直しをした
22	18	松石	家の柱は破損したが、3か月で復旧
33	8	東5丁目	地震から日を過ぎる毎に復興作業が始まり、1年か2年で幸手は2階建ての家が増えた
34	19	円籬内	翌年に母屋新築竣工
39	8	北1丁目	学校が半ヵ月ほど休みだった間に、物置の建て替えとその材料集めを行った
40	17	中4丁目	物価が急に高くなり、建築材料や日常生活の必要物資にとっても苦労した
41	8	中4丁目	自宅の壁の修理を3か月後することができた
43	23	神扇	村役場から見舞金10円をくれた
44	18	神扇	母屋建て替えて美しくなった
45	22	南1丁目	東北本線が開通した後、復旧工事も始まった
49	21	中2丁目	5、6日から復興作業を開始した

§ 3.『幸手町のかたりべ』に記載のある石碑と木碑

『幸手町のかたりべ』には幸手市内の関東地震に関する石碑及び木碑の記載がある。神明神社、香取神社、聖福寺、満福寺、宝性院の計5地点である。それぞれ現地を訪れて、碑文の読み取り調査をおこなった。

碑文については、なるべく石碑に書かれている通りに記述するが、一部入力できない漢字は新字に置き換えて記述する。また、碑文の内容については、関東地震に直接関係のあるもののみを要約して記述する。「/」は改行を表す。石碑の裏面及び金額と関係者の氏名のみ記載されているものについては、金額の合計額のみ記述する。

3.1 神明神社 (旧幸手町)

【所在地：幸手市中 2-1-5】

神明神社は、東武日光線の幸手駅より東に 350m

表 7. 幸手町神扇地区のボーリング調査結果
(株式会社カトー基礎調査研究所(1979)による)

Table.7 Structure of underground in the Kamiougi area of Satte town in 1979 surveyed by the institute of the Kato Kiso Survey Company Ltd..

神扇地区			
深度 (m)			N 値
1.15	~	1.47	2.8
2	~	2.55	0
3	~	3.54	0
4	~	4.5	0
5	~	5.45	6
6	~	6.45	0
7	~	7.55	0.7
8	~	8.5	0
9	~	9.52	0
10	~	10.48	0
11	~	11.55	0
12	~	12.54	0
13	~	13.45	0
14	~	14.45	0
15	~	15.42	0

ほどの県道 65 号沿いに位置する。造営史料によると、宝暦 5(1755)年の本殿建立棟札があるため 1755 年の建立と見られる[埼玉県神社庁神社調査団(1992)].

鳥居をくぐり、拝殿に向かって左側に関東地震による、町と当社の被害について記載された石碑(図 5)がある。この石碑の存在については、No.17 に記載されている。幸手市教育委員会生涯学習課(2005)に碑文が載っており、そのコピーを現地に持参して読み取りをおこなった(誤字・脱字を修正)。この石碑の正面には、次のように記載されている。

(正面碑文)

神明社拝殿新築記念碑

回顧スレバ去ル大正十二年ハ春來気温例年ニ比シテ稍高ク時々蒸熱ヲ催ス九月一日ハ未明ヨリ南ノ風雨強烈ニシテ暴風雨ノ兆候ヲ呈セシガ午前十一時三十分頃ニ至リテ風ノ雨俄ニ歇ミ蒸熱殊ニ堪ヘ難

ク暗雲低迷シテ何處トモナク陰慘ノ氣ニ充テリ全十一時五十七分突如上下ノ震動ト共ニ大地震起リ瓦石飛ビ沙塵卷キ老若男女ノ叫ビ家屋倒潰ノ響キ騒然轟然到ル處忽焉トシテ阿鼻叫喚ノ巷ト化ス即チ全町戸數一千餘戸ノ内約參百六十戸ハ一瞬ニシテ全潰シ半潰大破セルモノ過半數ニ達ス即死者九名重輕傷者三十餘ノ名ヲ算シ凄絶慘絶全町遽然トシテ一大修羅場ヲ現出ス其慘狀筆舌ノ能ク及ブ所ニアラズ實ニ是レ関東地方ニ於ケル前古未曾有ノ大震災ナリ而モ餘震ハ大小強弱頻々トシテノ連續シ各自其居ニ安ズルコト能ハズ戰々兢々トシテ屋外ニ避難スルコト數晝夜ニ及ベリノ當神明社拜殿モ亦此厄ニ遇フテ倒潰セリ本社ハ辛ウジテ全潰ヲ免レタルモ大破セシニノヨリ直ニ應急修理ヲ加ヘ尚拜殿ノ建立ヲ策シタルモ如何セン當町内ハ被害激甚ヲ極メタルヲ以テ財力之ニ伴ナハズ故ニ先ヅ敬神崇祖ノ大義ニ基ヅキ拜殿新築奉賛會ヲ組織シ五箇年計畫ノ方策ヲ樹シテ毎月會員ノ獻金ヲ蓄積シテ茲ニ金參千四百八拾圓七拾錢特ノ志寄附金參百壹圓六拾七錢其他町内積立金等ヲ以テ昭和三年七月工ヲ起シ全年十一月ノ完成ス而シテ拜殿新築費金參千七百五拾貳圓八拾八錢記念碑建設費金四百三拾七圓貳拾八錢ヲ費セリノ時偶千歳一遇ノ御大典奉祝ニ際シ町内ノ民衆一同神前ニ參拜シ木ノ香床シキ新拜殿ノ壯觀ヲ仰グコトヲ得タルハ是レ即チ神明懿徳ノ然ラシムル所ニシテハ好箇ノ記念ノトナリハ其光榮ヲ慶ブモノナリ聊カ梗概ヲ記シ以テ後昆ニ傳フノ昭四年四月二十一日建 一色賢山敬書

(碑文の要約)

大正12年9月1日は、未明から南風と雨が強かったが11時30分頃になると、雨は収まったが蒸し暑く、暗く低い雲が垂れ込めていた。11時57分に突如上下動を伴う大地震が発生した。瓦が飛び、砂塵が舞って、人々の叫び声と家屋の倒壊する音が響いて、辺りは騒然としていた。その結果、旧幸手町内の1000戸余りの家屋のうち、約360戸が一瞬にして全壊し、半壊や大破した家屋は500戸以上にのぼった。死者は9名で、重軽傷者は30名余りにのぼった。これは、関東地方における未曾有の大地震であった。その上、様々な強さの余震が立て続けに起こったため、安心して屋内に居られず数日の間、屋外に避難していた。

当神明神社の拜殿も被害を受けて、倒壊した。本殿は辛うじて倒壊を免れたが、大破したため応急的

な修理を施した。拜殿の建立を計画したが、旧幸手町は甚大な被害を受けたため、拜殿を建て直すお金が無かった。そのため、「拜殿新築奉賛会」を組織して、5ヵ年計画の方策を立てた。会員などの募金により、ついに3480円70銭、特志寄附金301円67銭、そのほか町内の積立金などを用いて、昭和3年7月に着工し、同年11月に竣工した。こうして拜殿新築費、3752円88銭、記念碑建立費、437円28銭を費やした。聞いたあらすじを記すことで子孫に伝える。

なお、この石碑の正面には地震発生時刻が「十一時五十七分」と記載されている。実際には八と七が重ねてかかっているが、七を八の上に重ねて書いていると判断した。

裏面には、「神明社寄附金人名」として、6段にわたって寄付者と寄附金額が記載されている。記載されている金額の合計は、3946円78銭である。



図5. 神明神社に建つ石碑

Fig.5 The memorial stone built in the Sinmei-jinja shrine.

3.2 香取神社 (旧権現堂川村)

【幸手市上宇和田 288】

香取神社は、東武日光線の東武動物公園駅より朝日バスに乗車し、「下吉羽」の停留所で下車をすると、そこから歩いていくことができる。幸手市の北東部(茨城県との県境付近)に位置する。創建の年代は「明細帳」によると、元禄16(1703)年9月16日にされたとある[埼玉県神社庁神社調査団(1992)]。

香取神社については、No.26に、「本殿上屋がずれ落ち、鳥居や灯籠が倒壊」と記載されている。鳥居をくぐり、社殿に向かって右側と左側に関東地震に関して記された石碑がそれぞれ建っている。幸手市教

育委員会生涯学習課(2007)に碑文が載っており、そのコピーを現地に持参して読み取りをおこなった(誤字を修正). 社殿に向かって右側に建つ石碑(図 6)の正面には、次のように記載されている。

(正面碑文)

香取神社社殿建設記念之碑／

当上宇和田は旧渡良瀬川の流域に拓かれ／た集落にして、古くは宇和田の地の名が／ありました。鎮守香取神社は経津主神を／主祭神として奉斎し世々村人の篤い崇敬／と信仰により永く護持されて参りました。／此度改築の社殿は大正十二年九月の関東／大震災更に昭和二十二年九月利根川決壊／による大水害で損害を受け老朽化甚だし／く再建念願の処偶々流作鎮座の浅間神社／が御本社境内地に移転し其の補償金を基／金とし氏子負担奉納金を加えて平成四年／六月着工翌年十月事業費貳千参百万円を／以て竣工いたしました。／茲に由緒深き産土神を敬愛し氏子各位の／繁栄を祈念して建設の記といたします。／平成五年十月吉日 氏子中／撰文宮司小島淳孝

裏面は4段構成で、1段目から3段目までに、寄付者と寄附金額(合計 9,930,000 円)が記載されている。



図 6. 香取神社(社殿に向かって右側)に建つ石碑
Fig.6 One of the memorial stone built in the Katori-jinja shrine.

また、社殿に向かって左側に建つ石碑(図 7)の正面には、次のように記されている。

(正面碑文)

震災復興

翌大正十三年九月一日／改築記念碑／香取社

裏面は4段構成で、1段目から3段目までに、寄付者の氏名と寄附金額が記されている。以下に、寄附金額を地域毎に記述する。

神社周辺...720 円

東京.....750 円

その他.....195 円

合計.....1665 円



図 7. 香取神社(社殿に向かって左側)に建つ石碑
Fig.7 The other memorial stone built in the Katori-jinja shrine.

3.3 聖福寺 (旧幸手町)

【所在地: 幸手市北 1-9-27】

聖福寺は、東武日光線の幸手駅より北に700mほどの、幸手市立幸手中学校付近に位置する。三門の脇に、本寺の歴史と関東地震に関して記載された石碑(図 8)がある。

碑文によると、本寺は応永年間(1394~1427)に創建された。江戸時代には朱印十石を頂き、将軍が日光詣でをするたびに本寺で休息をとったという。碑文は、幸手市教育委員会生涯学習課(2005)に記載されており、そのコピーを現地に持参をして読み取りをおこなった(誤字を修正)。石碑の正面には次のように記載されている。

(正面碑文)

菩提山東臯院聖福寺改築記念碑／我聖福寺ハ菩提山東臯院ト號ス應永年間安阿上人ノ創ムルトコロナリ其後百二十餘年を経テ大永年間乗譽岌／傳上人廢

ヲ興シ絶ヲ繼キ第一世ニ補ス徳川幕府ノ時朱印十石ヲ賜フ柳營家晃山祖廟ニ謁スル毎ニ本寺ニ就キ／テ休憩セラレト云フ第十八世見譽上人第十九世吉宣譽上人師資同心伽藍ヲ經營シ享保十年乙巳竣工ス寛保元／年辛酉第二十世愍譽上人普ク檀越ヲ募リ三門ヲ興建ス安政四年丁巳六月第二十四世還譽上人重建ス明治紀元／戊辰幕府傾覆シ 王政復古スルヤ朱印黒印ノ制ヲ徹シ五畿八道ノ伽藍ハ供養三寶ノ資源一時ニ涸渴ス本寺領／域三千五百六十五坪其大半ハ關宿藩士ニ歸屬シ千百二十四坪ヲ存スルノ窮乏殆ムト支フル能ハス當時仁譽／義觀上人第二十五世ニ補ス苦ヲ嘗メ辛ヲ茹フ氣運未タ熟セス興復ノ志達スル能ハス明治三十一年十二月二十／一日寂ス三十二年己亥十月不肖赫譽真靜其後ヲ承ケ第二十六世ニ補ス仁譽上人ノ志ヲ繼キ興復ニ焦慮スルコト茲ニ年アリ何ソ料ラム大正十二年九月一日關東一帶地大ニ震フ本寺亦災厄ヲ蒙リ損失多大修補ニ堪ヘス是ニ於テ乎昭和三年戊辰三月檀越總代諸彦ト相謀リ興復ヲ規畫ス爾來不肖銳意努力廣ク壇越信徒ヲ勸進セル／ニ同情翕然協賛功ヲ奏ス堂宇九十八坪昭和六年辛未十月起工シ七年壬申八月竣工ス輪奐舊ニ復シ莊嚴備足ス／庫裏八十坪八年癸酉十一月起工シ九年甲戌八月竣工ス厥位陽ニ面ス客室若干換氣採光頗ル衛生ニ適フ而シテ／屋上一切堂宇三門ハ總テ銅ヲ用キ庫裏ハ瓦ヲ用キテ之ヲ葺ク面目一新セリ工費累計貳萬四千餘金即チ是レ有縁ノ白衣諸彦奉佛致誠ノ結晶感激ニ堪ヘサルナリ但シ鐘樓ハ延寶二年甲寅十月五日第十七世單譽上人創メ／テ之ヲ建ツ年所既ニ久シ昭和十年四月起工シ是歲九月竣工ス工費貳千五百金即チ是レ特別信徒小倉氏賞ヲ捐／テ重建功ヲ奏ス篤志欽スヘシ茲ニ本寺沿革ノ概要及ヒ改築興復ノ事由ヲ叙シ謝恩ノ意ヲ寓スト云フ／昭和十年乙亥十月／大本山増上寺第八十一世真阿徹水題額／聖福寺第二十六世薰職赫譽真靜謹識 雅洞白石勇書

(碑文の要約)

本寺は大いに災厄を受け、損失は多大であった。昭和3年に復興を計画し、施主や信徒たちの協賛が功を奏し、堂宇98坪の修理を昭和6年10月に起工し昭和7年8月に竣工した。庫裏、80坪を昭和8年11月に起工し、昭和9年8月に竣工した。そうして屋上の一切と堂宇、三門は全て銅板を、庫裏は瓦を葺き、面目を一新した。工費は累計24,000円余りで、これを有縁の庶民のみなさんの募金で集めた。

聖福寺における本震発生時の状況について、No.17に、「境内の丈六の大仏の祀ってある九品仏堂と観音堂が同時に倒れ、土煙が上がった」と記載されている。さらに、余震が発生したときの様子について、「余震のくるたびに鐘桜堂の鴨居に梵鐘がぶつかり、ゴーンゴーンと言う音がして恐しかった」と記載している。



図8. 聖福寺に建つ石碑

Fig.8 The memorial stone built in the Shohukuji temple.

3.4 満福寺 (旧幸手町)

【所在地: 幸手市中 4-14-34】

満福寺は東武日光線の幸手駅より、北に300mほどに位置する。門から入ってすぐのところには小堂(六角堂)があり、中には「延命地藏尊」がまつられている。この地藏尊も地震によって破損してしまったことや、小堂が建てられた経緯について、No.16に、作者が叔母から聞いた話として記載されている。小堂の外壁に石碑(図9)が取り付けられている。碑文は次のとおりである。

(碑文)

延命地藏尊堂建立由緒の事／もと東京四つ谷に住む武井ひで女日／頃延命地藏尊の厚い信仰者なり／たま／＼大正十二年九月一日関東大／震災の前夜地藏尊夢枕に立ち満福寺／へ招かれ東京の大震災の災禍から免／れることが出来たのである。ひで女／は地藏尊の有難い御加護の賜である／と深く感じ翌十三年現位置に小堂を／建立せしものなり／しかるに此の度篤信の諸氏によって／近代的な六角堂が再建されたのであ／る。これ一重に延命地藏尊利益の賜／なり。十万の善男善女人霊徳に浴さ／れんこ

とを／南無延命地藏尊 合掌／昭和四十八年三月吉日

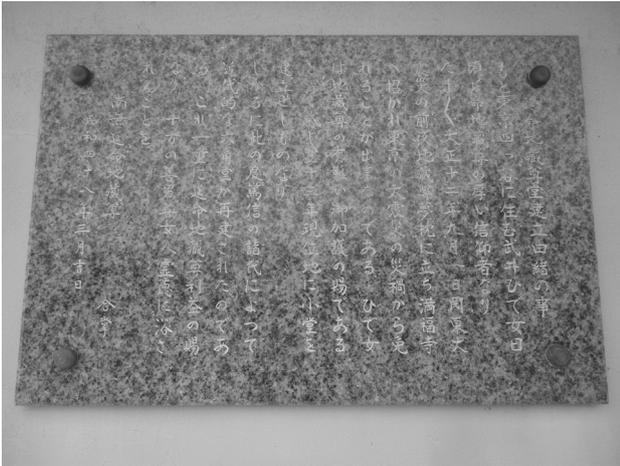


図 9. 満福寺の六角堂に取り付けられている石碑
Fig.9 The memorial stone hung on the hexagonal building in the Manpukuji temple.

3.5 宝性院 (旧行幸村)

【所在地:幸手市千塚 1338】

宝性院は、JR 宇都宮線の東鷲宮駅より、東に 600m 程に位置する。宝性院の屋内に関東地震に関する木碑(図 10)が保存されている。この木碑については、No.1 に記載されている。この木碑は寺院のご厚意により見せて頂くことができた。この木碑には次のように記されている(寄付者の氏名と関係者の氏名は省略)。

(木碑の碑文)

富院本堂庫裡再建築寄附芳名／(省略)／合計金四百九十四円也／大正十四年九月二十六日／宝性院 住職 大久保実子／(省略)

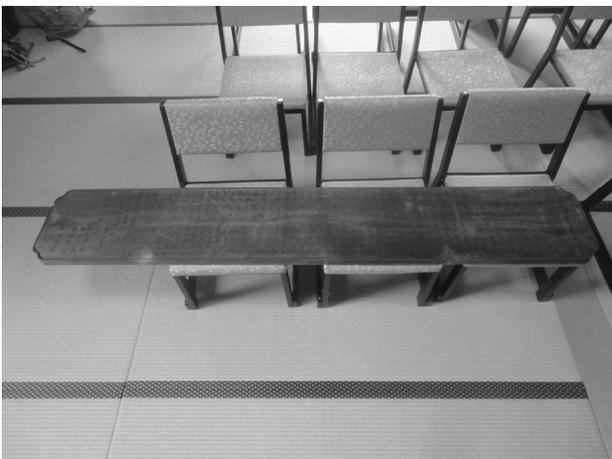


図 10. 宝性院に残されている木碑

Fig.10 The wooden memorial stone hung on the wall in the Hoshoin temple.

Fig.10 The wooden memorial stone hung on the wall in the Hoshoin temple.

3.6 『幸手のかたりべ』には記載されていない石碑

幸手市内には、§3 で記述をした以外にも、関東地震に関して記載された石碑が 2 基建てられている。本章では、これらについて碑文を記述する。

(1)神宮寺 (旧上高野村)

【所在地：幸手市南 2-3-19】

本堂のすぐ前(本堂に向かって左側)に「本堂改築之碑」(図 11)がある。碑文は、幸手市教育委員会生涯学習課(2010)に記載されており、そのコピーを現地に持参して碑文を読み取った(誤字を修正)。



図 11. 神宮寺に建つ石碑

Fig.11 The memorial stone built in the Jinguji temple.

(正面碑文)

本堂改築之碑／我ガ神宮寺ノ創建ハ文治年間鎌倉時代二時ノ征夷大將軍源頼公ノ開基ニシテ此年ノ間七百六十七年ノ歴史ヲ有ス然レドモ不幸ナルカナ焼失スル事二回此ノ間寛延元年ノ十一月十二日再建ナシタルモ去ル大正十二年九月一日関東大震災ニアイ大破セラ／レシガ二十九世圓譽善信上人代ニ修治再興シテ徳化ノ恩ニ報イ連綿トシテ今日ニ及／ベリ然リト雖モ霜雪風雨暴戾ハ長ヘニ其ノ美観ヲ許サズシテ再修ノ季運ヲ促スニ至／レリ依テ今回檀信徒有縁方ノ協賛ヲ得テ再工ヲ起セリ幾許ナラズシテ成功ヲ見ル即／チ昭和三十一年三月六日着工シ同年十月十四日遷座法要ヲ修行シ茲ニ完ク再治ノ行／裡ヲ終ル／昭和三十一年十二月吉日／鷹尾山 神宮寺 三十一世 明譽秀道 花

押

裏面には、6段にわたって120人の寄付者の氏名と寄付金額(合計790,030円)が記載されている。また、7段目には「神宮寺役員(住職・檀徒総代・世話人)」として計10人の氏名が、8段目には「修復会役員(会長・会計・委員)」として18人の氏名が記載されている。9段目には、「大工・瓦葺・左官・鳶・武力・塗装」として各1人ずつ計6人の氏名が記載されている。最後に、「青木武三郎 刻」と記載されている。

(2) 浅間神社 (旧幸手町)

【所在地：幸手市北2-4-28】

鳥居の左側に、「浅間神社再建碑」(図12)がある。碑文は、幸手市教育委員会生涯学習課(2005)に記載されており、そのコピーを現地に持参して碑文を読み取った(誤字を修正)。

(正面碑文) 浅間神社再建碑

大正十二年九月一日午前十一時五十八分突如東京横濱ヲ中心トシ関東ノ地大ニ震フ我カ幸ノ手町ハ此ノ災厄圈内ニ在リ戸數一千二十ヲ有ス内全潰セルモノ三百三十七戸半潰セルモノノ百二十戸更ニ神社佛閣校舎等ノ倒壊ヲ加ヘ四百七十二ニ及フ其他破壊ヲ被リタル家屋モ亦ノ甚タ多シ猶且九人ノ壓死者四十餘人ノ負傷者ヲ出ス加之余震數旬ニ亘リテ連續シ人心競々ノ其ノ居ニ安ンスルコト能ハス屢々屋外ニ避難ス惨害凄愴ノ状態其ノ極ニ達セリト云フヘシノ當淺間神社ノ拜殿及ヒ水舎モ亦倒潰ノ害ヲ被レリ是ニ於テカ郷黨相率ヒテ鋭意發憤各自ノノ復興ニ努力スルト同時ニ應急工事ヲ施シテ水舎ヲ修築シ拜殿ヲ假設シテ纔ニ祭事ヲ執行シノ來ルコト茲ニ數年爾來孳々汲々トシテ建築資金ヲ蓄積シ以テ本社ノ大修理並ニ拜殿ノ新築ノヲ企畫ス然ルニ其ノ建設山上地域狹隘ナルニ由リ更ニ東側半ヨリ北側一帯ノ石垣各段六尺ノヲ擴メタリ時ニ世ハ昭和ニ移リ我カ 帝室ハ御即位ノ大典ヲ舉ケサセラルニ際曾ス普天ノ下率土ノ濱齊シク大典ヲ祝スルノ聲ヲ揚ケ記念事業ノ叫ヒヲ為シタリキ本社ヲ建築スルノモ亦記念事業ノ一トシ茲ニ昭和三年九月十日エヲ起シ先ツ額殿ヲ新築シ尋テ本社ハ舊位置ノヨリ後方九尺ヲ距リ土盛りヲ爲シ周圍ハ混凝土ヲ以テ固メ其ノ中央ニ安置ス次テ拜殿及ヒノ幣殿ヲ新築シ四年五月竣エヲ告ケ同七月一日例祭日ヲトシ盛大ナル御遷宮式ヲ舉ケ

タリ工ノ程數年ニ亘リ工費總額七千五百圓ヲ算ススク工事ノ完成ヲ得タルハ畢竟神靈ノ光輝赫々タルト神徳ノ崇邃偉大ナルトニ因ルト雖モ又以テ郷黨ノ土人敬神愛國ノ情熱ト協心戮力ノ結ノ晶ニ據リタル發露ト云ハサルヘカラス敢テ謏劣ヲ省ミス聊カ工事ノ概要ヲ記スト云爾ノ 昭和五年八月遠藤孝吉撰文 白石雅洞篆額并書ノ青木武四郎刻

裏面には、1段目に、修復に関わる金額が次のように細分化して記載されている。

建築資金ノ金七千五百圓ノ内譯ノ金五千九百十五圓 荒宿町内氏子出資金ノ金壹千四十圓 浅間社基本金ノ金三百四十五圓 特志者寄附金ノ金貳百圓 幸手町補助金ノ工費ノ金七千五百圓ノ内譯ノ金二百五十六圓 大正十二年十二月急施工事拝殿仮設ノ金壹百七十圓 昭和二年一月水舎修築再建費ノ金四百八十九圓 全年三月

2段目から10段目には「建築費出資氏子連名」が、11段目には「建設委員」が記載されている。



図12. 浅間神社に建つ石碑

Fig.12 The memorial stone built in the Sengen-jinja shrine.

§4. おわりに

筆者らは、日々防災に注目して活動しており、その際に参考になるのは、実際に災害を経験された方々の体験談である。体験談は、災害の実態を後世に伝えていく目的で編纂されており、『幸手町のかたりべ』

の序章には、次のように記載されている。「幸手町のいろいろな災害や非常事態などの体験談を後世に伝え、そして災害の被害を最小限に食い止めたいというのが語り部のねらいでございます。」果たして、このようなねらいは達成されているのだろうか。結局のところ、資料は散逸されてしまい、後世には多くは伝わっていないのではないかと。石碑は後世の人に読んでもらうために建てられたはずであるが、実際に読まれる機会は少なく、年月の経過とともにいずれは風化して読めなくなってしまうだろう。体験談も同様に忘却されていってしまうであろう。筆者らは、それを少しでも防ごうと、本研究に着手した。

本稿では、『幸手町のかたりべ』の閲覧調査、5地点6基並びに2地点2基の計8基の石碑や木碑の調査をおこなってきた。それらを踏まえ、震災時の液状化などの被害状況、大火災を防いだ当時の人々の冷静さ、昔の人の言い伝えなど、様々な情報を明らかにすることができた。

本稿で述べてきた体験談は、防災を考える上で役立つことは間違いないであろう。そこで、まずは『幸手町のかたりべ』を現在、幸手市に居住する人々に伝えたいと考えている。筆者らの所属する理科研究部では、体験談や石碑のような貴重な資料を後世に残していくために、これからも活動を続けていく。

謝辞

宝性院では、木碑の解読に協力をいただき、正確に読み取ることができた。担当編集委員の西山昭仁氏と匿名の査読者1名から頂いた丁寧な助言は、本稿の改訂に大変有意義であった。卒業生(36期生)の石黒喬大氏には、原稿の内容の検討にご尽力頂いた。また、本校理科研究部(高校3年)の長澤啓太氏・広川周作氏・島田翔太氏には、原稿の校正に協力を頂いた。本研究は、武田科学振興財団より採択頂いた研究助成(高等学校理科教育振興奨励)により実現した。記してお礼申し上げる。

対象地震: 1923年関東地震

文献

荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017a, 埼玉県春日部市に残る1923年関東地震に関する石碑, 歴史地震

第32号, 77-86.

荒井賢一・小林優介・竹原輝・高木駿・山浦照良・安倍聡志・北廣創史, 2017b, 埼玉県春日部市に残る1923年関東地震に関する記録 ~大震災記念児童文集と大正12年粕壁町震災写真帳~, 歴史地震第32号, 103-106.

石黒喬大・荒井賢一・西山享佑・安倍聡志・平原優美・増田滉己・浜橋一徳・齋藤隆・木村円香, 2014, 埼玉県さいたま市に残る1923年関東地震に関する石碑, 歴史地震第29号, 111-128.

石黒喬大・荒井賢一・小林優介・西山享佑, 2015, 埼玉県さいたま市に残る1923年関東地震に関する石碑その2, 歴史地震第30号, 139-148.

Kanamori, H., 1971, Faulting of the Great Kanto Earthquake of 1923 as revealed by seismological data, Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo, 49, 13-18.

株式会社カト一基礎調査研究所, 1979, 幸手町立八代小学校屋内運動場体育館敷地地盤調査 報告書

諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 第2巻, 第3号, 35-71.

諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 第4巻, 第4号, 21-45.

埼玉県神社庁神社調査団, 1992, 埼玉の神社 一大里 北葛飾 比企一, 1500p.

幸手市教育委員会生涯学習課, 2005, 幸手の石造物 I 幸手地区, 260p.

幸手市教育委員会生涯学習課, 2007, 幸手の石造物 III 吉田地区②, 322p.

幸手市教育委員会生涯学習課, 2010, 幸手の石造物 VI 八代地区②・上高野地区・補遺資料 6, 322p.

幸手市市民生活部環境課ウェブサイト, 幸手の環境を学ぼう(地形分類図),

<http://www.city.satte.lg.jp/kankyounavi/02kyouyou/01chikei/05chikeizu/TIKEIframe.html> (最終閲覧 2017年11月)

武村雅之・諸井孝文, 2002, 地質調査所データに基づく1923年関東地震の詳細震度分布 その2 埼玉県, 日本地震工学会論文集 第2巻, 第2号, 55-73.